

(要約) 有機体の哲学とはなにか——方法としての美学：ベルクソン、ホワイトヘッド、ポアンカレ

本論は19世紀から20世紀にかけて活躍した哲学者・数学者であるベルクソン、ホワイトヘッド、ポアンカレを取り上げる。かれらの思考は数学との対決ないし対話から自らの方法を練り上げた。とりわけここでは方法としての直観がいかに美の観念と関わるかを問題にしたい。

ベルクソニズムは直観を方法とする哲学である。そこでは見ることには2つのやり方がある。外から見て観察し測定することと、その内側に入り込み内観することで、前者が知性、後者が直観である。外から差異を見分けるには知性で足りる。類似するもの同士の違いを内側から見抜くために直観が必要である。直観とは知的努力であり、知性により補われる。眼前の事象に深く浸透し、そこに生命的類似性を見分けつつ、個々の事象にぴったり合う説明を導き出そうとするのが直観の理論である。

ベルクソン哲学では時間が3層に区別される。実在的なものは「生きられるもの」としての現在である。潜在的なものは「生きられたもの」としての過去である。そして可能的なものは「思い描かれるもの」としての未来、過去から見られる未来であるがゆえに、フランス語の文法用語を用いれば「前未来」である。

ホワイトヘッドは一切の始まりに創造性を置く。創造性とは可能的なものの現実化である。過去との統一性なく人格の統一性はありません、人格的な存在たろうとするかぎりでは私たちは自らを振り返らざるを得ない。主体は自らの過去を半ば再演しつつ、半ば未来へ自らを投げかける。予期する主体は未来に向かい現実化するが、再演する主体は客体化し、永遠的客体と化して過去へ沈殿する。

『観念の冒険』は文明の一般的な定義として、真理、美、冒険、芸術、平和という5要素を挙げる。なかでも美と芸術が重要で、美は真理より広く根本的な概念である。文明が不断に前進し向上すると説き、その目的が美であると語りつつも、ホワイトヘッド哲学は美そのものの具体的な説明を欠く。また可能的なものの現実化を主軸とするその体系にベルクソンのような潜在的なものという第3項が存在しない。そのため進化を説明できず、ホワイトヘッドの哲学はむしろプラトンの古代哲学に近づく。

ポアンカレは感覚に訴える美と、知性の捉える美を区別する。科学が自然に見るのは、利害を離れた純粋な知性だけが把握できる、より内奥の美としての知性美である。それにより世界は道具化され、私たちと無縁でなくなり、馴染み深く利用可能なものになる。人間知性の進化の根源には知性美の発見があり、文明の進化はたんなる自然選択の偶然性に左右されないと彼は考える。しかるに感性美なく知性美のみが自立的・独立的に存在しうとは思われない。むしろ感性美と知性美との密接な関係を探究し、感性と知性の間に共通する美の源泉を見出すべきである。

ポアンカレが強調するように、科学が自然に美を見て取るとき、そこには必ずや偶然性が関わる。美とは、出会いとはエロスのものである。不意打ちに開かれながら自らを組織化し、生成発展し、ついに生命の大いなる調和に至ろうとする美こそが、そもそも進化の源泉ではなかったか。学知の発展のためには出会いが組織化されるべきである。